

補説①

代表されるものである。白居易のこの感慨は、蟬を秋の景物と見る意識の前提があつて、始めて成り立つものである。秋は、人生の秋を予感させる。人はそのとき帰らぬ家郷のことを、懐かしく思い出すのである。」（傍線筆者）



○130 句目「斗建指星躔」の「斗建」について

松浦友久編の『漢詩の事典』の「北斗」の項に次のような説明がある。

「北斗」は時間の経過につれて、長い柄を振りながら北極星の周りを反時計回りに回転する。そこで、「北斗」には、時間の推移を寓意することがある。「北斗」が星座の代表となつたのは、その円周運動の中心に北極星を戴くからである。その「北極星」は天の中央に位置して、その周囲に星を回らせている。それは権威の象徴であり、また地上の権威である天子と朝廷の譬喩であつた」。

▼さびしげな秋の夜空に北斗七星の柄の方向は、西を向いている。西の地太宰府にまだ留め置かれている状況の中で、帰りたくても帰れない京の都への望郷の念が、こうした状況に我が身を置くことで、いつそう強くなつたのではないかと思われる。

補説②（その1）